

柳田国男とベーシック・モラルティの問題

川田 稔 (kawada@info.human.nagoya-u.ac.jp)

[名古屋大学]

Yanagita Kunio and fundamental morality of Japanese people

Minoru Kawada

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Japan

Abstract

It has been pointed out that in Japan fundamental morality is on its way to deterioration. Various social problems have been caused by that. A folklorist Yanagita Kunio, known as a leading intellectual in modern Japanese society, recognized the importance of fundamental morality in Japanese society. He thought it would be a meaningful academic discussion for the future Japanese society. In fact, he was foreseeing the serious social situation Japan is now facing. In this paper I would like to discuss his thought-provoking arguments on this issue.

Key words

fundamental morality, Yanagita Kunio, Ujigami, Shintoism, concept about the soul

1. ベーシック・モラルティの現代的危機

最近の日本では、社会のいわゆるベーシック・モラル、人との関係における基本的な内面的倫理意識の崩壊と、それによるさまざまな問題の噴出が指摘されている。これは、子どもの世界や若者の世界に、陰湿な「いじめ」や学級崩壊、暴力化の広範な拡大の傾向などとして典型的にあらわれてきているが、現在、哲学や思想史の領域でも、そのようなモラルティの問題、倫理的なものの問題の重要性が、つよ意識されるようになってきている。

明治・大正・昭和を生きた近代日本の代表的知識人として知られる民俗学者柳田国男も、その問題の原理的重要性を意識し、将来の日本にとっての大きな学問的・思想的課題としてとりこんでいる。

彼がそのような問題に実際に直面したのは、おもに第一次世界大戦後からであった。大戦とその後の国際競争力の強化をめざした原内閣などの産業育成政策を契機に、日本もまがりなりにも高度資本主義というべき局面にはいって行く。柳田は、そのような急激な工業化、都市化の進展にともなって、人口の急速な流動化が進行するとともに人々の生活が広範囲に変化し、そのことによって、それまで一般に人と人との関係をささえてきた内面的な倫理意識がくずれはじめ、一種のア・モラルな、索漠とした世相があらわれてきていることを重視していた。このような状況は典型的にはもちろん都市にでてきていたが、それが徐々に農村にも影響をあたえてきており、時代が進むとともにおそらく深刻な問題になってくるだろう。したがって、将来日本人の内面的倫理をいかに形成していくかということが、今後のおおきな思想的課題のひとつになる。そう考えていた

のである。

「現代日本人は一般にただ利と競争のみにさどく思ひやりが少なく、人の弱みにのみ明るくて助けることを知らぬ者、手前勝手な孤立人種の如き印象を与へんとして居る……。其悪弊の集積層は、本来は田舎に非ずして都邑であつた。都邑には異郷人充満し、其間には連絡も無く、又節制も無かつた故に、所謂生き馬の目をも抜かうとする者があり、又人を見たら泥棒と思わなければならなかつた。交通と雑居が盛んになつて、田舎も少しづつ是にかぶれて来た⁽¹⁾」。

そこから柳田は、そもそもこれまで日本人の基本的な内面的倫理意識は、どのようにして常民すなわち普通の人々のなかにはぐくまれてきたのか、いわば人々のあいだでベーシック・モラルの形成はいかにしてなされてきたのかを追求しようとした。そして、それを明らかにすることによって、問題が顕在化しつつある現状に対処していく方法を考えようとしたのである。ここで柳田が問題にしているのは、普通の人々のあいだでの相互関係における日常的なモラルで、いうまでもなく国家についてや社会的地位の上下関係についての「道徳」を意味しているのではなく、右の柳田の言葉でいえば、いわば他者にたいする「思ひやり」、他者を一個の尊厳ある存在として尊重することを基本とするものである。そして、現在もまたそのような根本的なモラルが問題になっているのである。

もちろん柳田の生きた時代と現代とは、かなりの時間的な開きがあり、社会的な状況も大幅に変化している。したがって柳田の議論を直接現代にあてはめることができないのはいうまでもない。

しかし現在日本社会が直面している、ベーシック・モラルの危機的な状況に対処していくには、これまで人々のあ

いだでどのようにして基本的な内面的倫理意識が日常的に形成され、受け継がれてきたのかを考えておくことは必要なことではないだろうか。柳田その人については現在賛否さまざまな評価がなされているが、この問題についての柳田の議論は示唆するところ多いと思われる。しかも、後にふれるように、柳田はすでに将来の問題として現在のような事態の到来を予測していたのである。そこで、柳田のこの点についての議論を紹介し、広くモラルティ問題についての今後の検討への参考に供したいと思う。

現在の、いわゆるベーシック・モラルティの崩壊の問題は、きわめて深刻な事柄であると同時に、想像されている以上に根の深い、かなり長期的な視野からの検討を必要とする問題である。したがって、この問題に取り組むには、これまでの関連する経験と知的蓄積を総動員して、さまざまな角度からアプローチを試みるのが要請されていると考えられるからである。

2. 日本人の心性と倫理

さて柳田は、その民俗学研究において、一般の人々の伝統的な生活文化を全体としてあきらかにしようとしたのだが、なかでも信仰の問題をもっとも重視していた。それは、信仰というものが、どのような社会においても伝統的な生活文化の基底にあり、そうとうのインパクトをそれに与えていると考えていたからである。

一般には、日本人のものの考え方やひろい意味での思想をかたちづくっているものとして、だいたい神道、仏教、儒教、そして欧米の諸思想があげられる。柳田もほぼ同じである。ただ彼の場合、神道をさらにおおきく、いわゆる教義化された神道とりわけ国学系の、国家神道につながるものと、ふつうの人たちのそれぞれの地域の神社にたいする日常的な信仰、すなわち氏神信仰とにわけ、後者の氏神信仰こそ日本人のものの考え方や人生観にもっとも大きな影響をあたえている、いわば日本的心性の核を形成していると考えていた。そしてそれを日本人の心意、いわゆる日本的心性を構成するもっともベーシックなものとしてとらえ、その解明をことに重視しているのである。

ちなみに国学は、江戸時代中期から幕末にかけて、本居宣長や平田篤胤によって『古事記』『日本書紀』をベースに形成され、国家神道はおもにそれをもとに明治政府が事実上の国教としてつくりあげたものであった。国家神道では、地域の氏神にたいする一般の人々の信仰も、古事記・日本書紀にもとづくみずからの教義と同じものであり、それらを包摂したものだとして主張していた。

柳田はそれにたいして、人々の氏神にたいする信仰と国家神道とは異質なものであり、後者は人為的ないずれ消失しかねないのだとみていた。一般の日本人のものの考え方や価値観にもっともつよい影響をあたえているのは氏神信仰であり、それは日本土着の、いわば日本固有のものだとかんがえていた。なお仏教ももちろん日本人の信仰において軽視しえない要素であるが、柳田はさらにその基層に

氏神信仰があるととらえていたのである。

ちなみに、氏神信仰が日本人のものの考え方や思想のベースになっているかどうかについては、異論がないわけではない。しかしすくなくとも近代日本人の心性や生活において、氏神信仰の問題が重要な位置をしめていたことはまちがいのないところである。そして氏神信仰の全体像の実証的な研究としては、現在のところなお、柳田の研究をこえるものではなく、その後の研究は、その全体像の一部を修正するか、ないしそれに新しいものを付けくわえるというかたちで展開している。

氏神信仰の問題が、このように柳田にとって重要な意味をもつのは、それが一般の日本人の生の内面的な意味づけ、つまり人々の生きがいや価値観につよい影響をあたえてきたと考えているからである。人々の生活文化の核にある生のモチーフ、生きる意味づけ、価値判断の基準になっているととらえていたわけである。そしてそのこととかわって、この氏神信仰が人々の内面的な倫理意識、つまり一般の人々のあいだに他者や自然との共生をささえる内面的な倫理、いわばベーシックなモラルティをはぐくむうえで重要な役割をはたしてきたとみていた。

なぜ内面的な倫理意識と、生の意味づけ、生きがいというものが関連するかといえば、人々が生きていくうえで、その生きがいの観点から、他者や自然をどう意味づけるか、その価値観が、基本的には他者や自然にたいする態度を決定しており、倫理意識のベースをなしているからである。

人間にとって、自分のさまざまな欲求を充足することはもちろん生きていくうえで重要な事柄であるが、それとやらんで、意識されているかどうかは別にして、なにかのために、いいかえれば何らかの目的にしたがって人々は生きている。それが生きる意味、生きがいの問題である。それがその人々にとっての価値観の基礎をかたちづくっている。そして、このような人々の生きがいや価値観は、宗教的な信仰からつよい影響をうけている。したがってまた、人々の倫理観、他者や自然にたいする倫理観もまた宗教的なものを背景に形成されてきた。柳田はそう考えていた（このような見方は、柳田に限らず、20世紀を代表する社会学者とされている、ドイツのマックス・ウェーバーやフランスのエミール・デュルケムなどにも共通する考え方である。なお、あまり知られてはいないが、柳田はデュルケムから軽視しえない学問的・思想的影響をうけていた）。

よく、日本人の倫理、モラルは外面的なものだといわれている。他者にどう思われるかを重視する、その意味で内面性の欠如した倫理だと。そのような論者として、『菊と刀』の著者ルース・ベネディクトがよく知られている。また戦後の著名な社会学者である大塚久雄氏や川島武宜氏などもそのようにみていたようである。

それにたいして柳田は、日本人の倫理意識も内面的な信仰にささえられているものであって、けっして外面的なものとはばかりはいえないととらえていた。たしかに、個人々人

における倫理意識の形成過程において、地域における集団的な規制力、外的な規制力が軽視しえない機能をはたしており、柳田自身そこにおいて内面的な原理性、固有の内発的な規範力が相対的に弱いことは認識していた。しかしその核には個々人の信仰、氏神信仰が存在しており、人々の倫理意識も基本的にはそれを基礎にした内面的な性格をもつものだととらえていたのである。

「今日までどうしてこんないい人がおったかと思われるような人が、たくさんいたが、そういう人はけっして生まれつき天真爛漫というのではなくて、そこには彼等自身の主観的な批判があつてはじめて出来たので、こういう批判は信仰から出発している。……少なくとも独立心のある者なら、右しようか左しようかというとき、ちゃんと一定の基準があつた。そういう基準を示して指導したものは、部曲の氏神で、本来はまた祖霊の信仰〔氏神信仰〕というものであつた。……我々が宮参りをした産土の社がそれである。この信仰が、日本人の幸福を守つたばかりでなく正邪の基準を示したのである⁽²⁾。

一般に倫理的な意識について、それはほんらい人間の自然性に内在しているものだとの見方がある。人にたいする思いやりの意識というようなものは、いわば自然に心のなかにそなわっているもので、それを壊しているのがいけないのだ。人間が自分のなかにある自然をたいせつにし、それを育てていかなければならない。いわば自然に帰れ、という考え方である。

またある意味ではそれと逆に、いわゆる未開社会では人間の意識は倫理的なものもふくめて野蛮な低い段階にとどまっているが、文明の進展によって人間的な倫理意識もおのずから形成されてくる、ないしは学問的な検討によって普遍的なかたちで形成されうるものだという考え方がある。

しかし柳田はそのような見方にはたっておらず、個々人が生きる意味をどう考え、他者や自然をどのように意味づけているか、その価値観が人々の倫理意識、たとえば人にたいする思いやりや自然をたいせつにするような倫理感覚の基礎をなしており、そのような生の意味づけや価値観はこれまで宗教的なものを背景に形成されてきたととらえていたのである。先にもふれたように、このような観点はまた、デュルケムやマックス・ウェーバーなどにも共通するものであつた。そして柳田は、仏教や儒教その他の影響も視野にいれたうえで、日本人の倫理形成において、氏神信仰がもっとも重要なファクターをなしているとみていたのである。なお、いうまでもないことであるが、彼らが念頭においている宗教は、ながい歴史的経過のなかで、あるていど社会に広範にうけいれられているそれであり、いわゆる新興宗教のようなものがイメージされているわけではない。

3. 氏神信仰とは

さて、柳田のいうように、人々のあいだで倫理意識がくずれつつあり、将来そのことが重要な問題になってくるとすれば、これまで倫理的意識が人々の内面においてどのようにして形成されてきたのか、人にたいする思いやりというものがどのようにして人々の心にはぐくまれてきたのか、それが問われなければならない。それが柳田にとって大きなテーマのひとつになる。このように柳田は、前述した、新しい生活のあり方を考えていくためにこれまでの日本人の生きがいをさぐるという関心とならんで、将来の倫理形成の観点からも、日本人の信仰、すなわち氏神信仰の問題を追求していこうとするのである。

では、氏神信仰とは具体的にどのようなものだったのだろうか。しばらく、それを柳田の議論にそくしてみよう。

このころ、つまり柳田が生きていたころの日本には、それぞれの地域にかならず「氏神さま」もしくは「うぶすなさま」「お宮さん」などとよばれる森や木々にかこまれた小さな神社があつた。現在でも、場所によってはもうなくなってしまっているところはあるが、それでもほとんどのところで何らかのかたちでこっている。氏神信仰とは、そこにまつられている神、すなわち氏神にたいする地域の人々の信仰である。

柳田によれば、もともと氏神はそれをまつっている人々の祖先の霊が融合したものと考えられていた。そのさい、はじめの祖先の霊ばかりでなく、その後の代々の祖先の霊も包含したものとみなされており、したがって、一般的に人は誰でも死後には一定の期間をへて氏神に融合するものとされていた。

そして氏神は、その土地に住んでいる人々にとって、自然的な脅威や他地域の人々による侵害から守り、その生活と領域を保護するものであつた。その意味でこの神は、土地の境をまもる神であり、また人々の誕生と成長を育むとともに、その生活に必要な動植物とりわけ農産物の生育をうながす神、すなわち日常生活全般にわたってその地域の人々を守り助ける神であつた。この氏神の守護にたいして、人々は年々一定の時期に神をまつる儀式、春秋の祭をおこなっていたのである。したがって氏神は、農産物のなかでもことに重要視されている稲をはぐくむ神、そしてそれに必要な水をめぐむ神とも考えられていた。

この氏神は、多数の霊の融合体という性格から、人格的な姿をとっておらず、ふつうは特定の名前をもたないものと考えられていた。この点、ギリシャ・ローマの神々やユダヤ・キリスト教の神とはもちろん、人格神的なかたちをとる古事記・日本書紀の神々ともことなるものであつた。

ではなぜそれを氏神とよぶかということ、現在はある地域に住んでいる人たちは、それぞれ姓がちがう。すなわち家系をことにする人々によって構成されている。ところが、かつて古い時代にはひとつの集落は、だいたい大家族制のもとに「氏」とよばれる単一の家系によって構成されてい

た。そして柳田は、それぞれの氏がその神すなわち氏神を信仰していたとみていたのである。それが、おもに中世から近世初頭にかけて集落の編成原理が変化し、現在のようになり、さまざまな姓の人が混住するかたちになったのであるが、そのさい氏神にたいする信仰そのものは、歴史的な経過をへながらも人々にうけつがれたと柳田は考えているのである。

さて、さきほど人は誰でも死してのちは氏神に融合していくと述べたが、死後すぐに祖霊と融合して神になると氏神に融合するとされていたわけではない。それには一定の期間が必要であるとみられていた。それは死のけがれという問題があったからである。柳田によれば、死者のもつけがれは聖なるものにとっては、つまり氏神にとってはつよいタブーとなるものであった。したがって死者の霊は、このけがれから浄化され清まらないかぎり神となって氏神に融合することはできないと考えられていた。

ではその死のけがれから清まり浄化される期間はどれくらいかという点、これについてはいろいろな伝承があるが、柳田はほぼ30年前後であったであろうと推定している。この30年というのは、だいたい世代が循環する年代で、そのあいだに死者の記憶が薄れ、また死者の肉体が完全に土にかえって、埋葬場所を示すような木や石がほぼ他の自然物と区別がつかなくなってくる、そのような期間である。そして、このほぼ30年間、死者の霊が浄化され氏神に融合していくためには、定まった形式による子孫の供養が必要だとされていた。

このように30年前後経過して神としてまつられようになると、同時に個人の霊はその個性をうしななって氏神に融合する。したがってさきに述べたように氏神は、特定の人格的な姿をとらない、後からくるものも全部融合していくような非人格的な霊的存在、それゆえ目に見えないものと考えられていた。

また死のけがれの問題があることから、両墓制とよばれる特徴的な墓制が一般化した。すなわち、死者のけがれをさけるために、集落からさうとう離れたところに、だいたい付近の山のふもと谷の奥に「埋め墓」とよばれる死者を葬る墓があり、さらにそれとは別に、村の居住地域のちかくに「参り墓」とよばれる墓がつくられている、そのような形式の墓制である。参り墓は、子孫が死者を供養するためのものであり、柳田のみるところ、氏神信仰では死者の霊は子孫の供養があつてはじめて浄化され清まってくると考えられていた。すなわち死者が氏神に融合し神となっていくには子孫の供養が必須だと観念されていたのである。柳田は、後述するように、それが日本人のメンタリティを形成するうえで重要な役割をはたしてきたものとしてとらえていた。

したがって日本人の霊魂観念には二種類のものであったわけである。一つは、いわゆる本来の「みたま」とよばれるもので、死後30年ほどの子孫の供養をへて、浄化され清まった霊として氏神に融合していくもの。もう一つは、その条件をみたしていない、まだ死のけがれが残存している

霊、いわゆる「荒忌のみたま」である。

しかし、日本人の霊魂観念には、さらにもう一つべつのものであった。それは、死のけがれが浄化される可能性のない霊である。これはまず子孫のたえた霊がはいる。死の穢れから清まるには子孫の供養が必要とされていたので、子孫がいなくなるとそれが不可能となるなわけである。さらに行きだおれや事故などによる身元不明の死者も子孫の供養がうけられず、神となることができない。また、つよい恨みをもち、この世にはげしい執着をのこしている霊、すなわち怨霊もまたこの第三の種類³の霊魂にはいる。

この第三の霊は、ふつう「無縁」や「餓鬼」などとよばれている荒れる霊、すさぶ霊で、一般にさまざまな厄災、ことに自然災害や害虫発生、伝染病などの原因になると考えられていた。怨霊の問題は、梅原猛氏などが、おもに仏教との関連で、聖徳太子や柿本人麻呂の問題などいろいろなかたちであつてはいるが、それは柳田の観点からすれば、このような霊魂についての日本人の古くからの観念が背景になっているわけである。

では、最初の浄化され、清められた霊はどこへいくのか。つまり人々の死後の魂はどこへいくと考えられていたのだろうか。

柳田によれば、死後の浄化された魂が融合していく氏神は、この世とはことなる別の世界にいくのではなく、この世界から完全には断絶しないで、自分たちの子孫の住んでいるところが見える、ちかくの山のいただきにとどまっていると考えられていた。そして代々の祖霊は氏神となって、郷土や子孫とのつながりを失わず、年々時を定めて子孫のもとに行きかよい、彼らの生活を見守っていると信じられていた。すなわち、「死んでも[その魂は]同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念して居るもの⁴」とみなされていたのである。

「曾ては我々はこの現世の終りに、小闇く寂かなる谷の奥に送られて、そこであらゆる汚濁と別れ去り、再々として高く昇つて行くものと考へられたらしいのである。我々の祖霊は既に清まはつて、青雲たなびく峰の上に休らひ、遠く国原を眺め見おろして居るやうに、以前の人たちは想像して居た⁴」。

このように、死のけがれから清まった「みたま」は氏神と融合して、村のちかくの山のいただきから子孫を見守っており、さらにはその氏神が毎年時期をさだめて村里をおとずれると考えられていた。その神のおとずれにかかわる信仰儀礼が春と秋の村祭であった。

柳田は氏神信仰のポイントをほぼこのようにとらえていた。そして、初詣や節句、新生児の宮まいりや七五三などさまざまな民間の年中行事も、仏教的なものや儒教的なものなどが多かれ少なかれ混淆しながらも、ほとんどが氏神信仰がなんらかのかたちで背景にあるとみていた。

4. ベイシック・モラリティ形成の内面的基礎

さて、ではこのような氏神信仰と人々の倫理意識とはどのような関係にあるのだろうか。柳田によれば、氏神信仰では人は誰でも死してのちは一定の期間をへて氏神に融合すると想定されており、したがって人々はみな、子供はもちろん老人や障害をもった人も神になるべき存在として、可能なかぎり尊ばなければならないと考えていた。

たとえばに老人の場合、さまざまな社会的な経験が蓄積されているということで、一般に今よりその人たちの役割は重視されていたが、たとえ何らかの事情でそのような役割をはたせなくなったとしても、まもなく神になっていく存在として、やはりできるかぎり尊重しなければならないと考えられていたのである。それが、人々の共生をささえる倫理意識の一つのベースになっていた。柳田はそうみている。

ただし、さきにふれた靈魂観念の三類型と関連するのだが、亡くなった人が氏神に融合していくためには、そうとう長期にわたる子孫の供養を必要するとされていた。また、氏神の祭というものは、その子孫からなる村人たちによっておこわれるべきものと考えられていた。それゆえ日本人は、「家」の永続ということ、つまり自分たちの家系が、その子孫が永続していくということをもっとも重視していた。生のモチーフのひとつがそこにあったわけである。家を絶やさず、子どもを育て先祖をまつり、死後は神となって子孫を見守っていくことを、ひとつの重要な生きがいとしていたのである。

さて、このような代々の祖先が神となって子孫を見守っているという氏神信仰の考え方は、柳田のみるところ、死してのちも子孫を愛護し何らかその役にたちたいという人々の痛切な願いを背景とするものであった。そのような自分の子孫のゆくすえについての人々の願いを、柳田は、ふつういわれるような自分の家族のことだけを考える、一種エゴイスティックな広がりのないものとしてではなく、肯定的にとらえている。

それは、どういうことかという、人々の生活というものは、決して孤立しては営まれていない。たとえば、子どもの成長ひとつとってみても、家族・親族ばかりでなく、地域や学校その他さまざまな社会的文化的諸関係と密接なかわりをもっている。成人になればその社会的な関係はもっと広がっていく。したがって子孫がすこやかに育ち、その生活がそれほど大きな苦しみもなく充実したものとして営まれていくには、それを取りまく社会や文化が豊かな、より良いものとなっていかなければならない。それらをはぐくむ自然が大切にされなければならない。人々が自分自身のことだけでなく真剣に子孫のことを考え、その生活と社会や文化、自然との関係を意識的にとらえていけば、そのことを自覚するはずだ。そう柳田は考えているからである。

つまり、いくら自分の家族のことだけを考えようとしても、それを自分の子ども、自分の孫というふうに見ていき

ますと、自分の子供や孫でさえ自分の力でカバーできる範囲はかなり限定されている。空間的にも時間的にも極度にせまい範囲だといっていいただろう。いわんやその子や孫になるとまったく力がおよばない。自分の子供のこと、自分の孫のことを本当に考えようとするならば、彼らがひろい社会的関連のなかで育っていき、これから生きていかなければならないということを、とうぜん理解できるはずである。したがって真剣に自分の子供のこと自分の子孫のことを考えようとするならば、自分の子どもや孫のことだけではなく、それを取りまく社会に生きている他の人々、そしてその人々によって形成される社会や、そのベースにある文化というものがより良いものになっていかなければならないし、そういう社会や文化をかこむ自然も大切にされねばならない。自然は自分のためのだけではなく、子孫のため、また彼らとともに生きる他者のための自然でもあるわけわけだからである。

このことは、他者や自然にたいする倫理的な価値づけと密接にかかわっていた。したがって、柳田はこのような氏神信仰が、意識されているかどうかは別にして、これまでの日本人のベイシックなモラリティ、内面的な倫理意識の一つの重要な基盤に、さらにある意味では日本人の公共的な意識というものの一つのベースになっていくというふうに見ていたのである。それゆえ柳田は、この氏神信仰の原像とその歴史的展開を民俗学的方法によって再構成し、それを人々がもういちど自覚的に意識化することによって、可能なかぎり内面的な倫理形成力を再生させようとしたのである。

そしてこのような倫理形成のひとつのプロセスをさらに意識的なものにしていくには、一般の人々が自分の子孫のことを考慮するとともに、その子孫たちと社会・文化・自然との現代的な関係をあらためて明確に認識していくことが必要だと柳田は考えていた。そのことは、柳田においては、学問的な認識を意味するものであった。自分や子孫の生活が、さらには自分たちだけでなく人間の生活というものが、一般に社会や文化や自然といかなる関係のあるかということ、つまり人々がいかなる社会的文化的自然的関連のなかにあるかを、普通の人たちが具体的かつ客観的に認識する必要がある。そのためには学問的科学的認識が一般の人々にも求められ、かつ、それを「教育」によって次の世代につたえていかなければならない。そう柳田は考えていた。

これが柳田の主張していた「現代科学の必要性」ということであり、民俗学もその一環をになうべきものであった。ちなみに柳田の立場は、価値判断はあくまで個人に属することであるが、その価値判断をみずからできるだけその個々人の目的にたして妥当なかたちでおこなうためには、また個々人が生の目的、生きる意味を深く広く考えていくためにも、学問的科学的認識が必要だとするものであった。したがって柳田においては、自然に形成されたものの伝統的なものがそのまま価値をもつというのではなく、それを現代に生きる人々の意識的ないとなみや学問的な認

識によって生かしていくことが必要だと考えられていたのである。

5. 将来の問題

しかし、柳田においても、氏神への人々の内面的信仰がそれほど永くつづいていくとは考えていなかった。長期的にみれば、モダニゼーションのさらなる進展のなかで、いずれそれは消失していくであろう。それが良いことであれ悪いことであれそうないかざるをえない。そうみていた。

そして現在、氏神信仰は、各種の祭礼や初詣、七五三などの儀礼としては残存しているが、内面的な信仰としては、したがって人々の倫理意識をささえるものとしては、もはやほぼ完全に消えさっている。しかも最近、すでにふれたように、社会におけるベーシック・モラルティの崩壊とそれによるさまざまな問題の噴出が指摘され、倫理的なものの重要性がたつと意識されるようになってきている。これからの日本人の倫理形成はいかにして可能なのか、今あらためてそのことが問われているのである。

では、この氏神信仰が消えさったあとの日本人の内面的倫理形成の可能性は、どのようなものとしてありうるのだろうか。柳田自身の言葉としては、その点について積極的には何も語っていない。おそらく彼が生きていた段階では、そのことについてはっきりしたことを言うのは不可能だと考えていたのであろう。将来おそらく、あらためて生の意味や生きがい、そして新しい時代に対応した倫理的なものの、内面的な倫理形成の根拠がいかにして可能なかが、問われる時がくるだろう。そのとき参考になりうる一つの資料としても、したがって柳田自身が生きていた時代だけではなくて将来の日本のためにも、これまでの日本人が、どのような信仰をもち、どのような価値観をもって生きていたのか、いかに倫理的なものを基礎づけていたかということ、ある体系だったものとして残しておこうと考えていたように思われる。

先日、新聞紙上である著名な識者が倫理の問題にかかわって宗教教育の必要性を説いていたが、柳田の観点からすれば、宗教的信仰そのものは、すぐれて内面的なものであり、公的な教育や外部からの教宣によって形成されるものではなく、しかも、非宗教化世俗化は20世紀的な高度産業社会では不可逆的に進展していかざるをえないものであった。その点は、ウェーバーやデュルケムなども同様にみていた。この見方からすれば、いかなる意味での「神の国」の再興もまた、現代社会においては内面的な意味では良くも悪くも不可能なことであった。ある意味では、そこに問題の深刻さがあるといえよう。柳田は、内面的な宗教意識が社会的にいったん消失したのちには、宗教的な方向でベーシック・モラルティを人々のあいだに再構築していくことは不可能だとみていた。それは、人々の、したがって社会のきわめて意識的な営為によるほかないと考えていたのである。そして、それには、おそらく日本のみならず

広く世界史的視野からの見方が必要となるのであろう。

ただ、それにしても、将来の方向について柳田が考えていたであろうことの一部を、ある程度推定してみることは可能である。たとえば、さきに、氏神信仰の背景には、死してのちも子孫を愛護し何らかの役に立ちたいという人々の痛切な願いがある、との柳田の見方にふれた。じつは柳田は、このような人々の願い、つまり自分の子孫のことを考えるということは、ある特定の時期のもの、ある時代特有のものというよりも、時代をこえた通時的な性格をもつものとみていたように思われる。つまり自分の子どもや自分の子孫がすこやかに育ち、その生活がそれほど大きな苦しみもなく充実したものとして営まれることを願うのは、ある時代に限らないものだ。そうすると、さきほど述べたように、ほんとうに自分の子どもや自分の子孫ことを考えようとすれば、その子どもたちがおかれている社会や文化を、より良くしていくという方向を考えていかなければならない。そしてその社会や文化は、まさに他者や自然によって構成されているわけである。それゆえ当然、他者や自然との共生ということを意識的に考えていかなければならない。そこにやはり将来の倫理形成、ベーシック・モラルティ形成へのひとつの糸口があるのではないのか。そう柳田は考えていたのではないのだろうか。

「子供が父よりももつと幸福に活きんことは、父とても決して之を望まぬことはあるまいが、母ほど痛切に之を感じては居ない。……せめて我子等には同じ苦しみはさせたくないと思はず居られぬのは母であつた。仮に自分はもう〔その苦しみを〕如何することも成らぬとしても、それは同時に又次に来る者の経験であつて、代つて彼等の為に利用する望みはあつた。以前は祈願信念のただ一つの力にしか頼れなかつたのであるが、現在は教育がまだ幾つかの機会を供与する。心身の発達能く一生の艱難に堪へるだけで無く、更によく疑ひ又よく判断して、一旦是と信ずれば之を実行するだけの、個人の力といふものを養ふことが出来るかどうか。……いつ迄経つても親々は其苦闘を中止せぬであらう⁽⁵⁾」。

注

- (1) 「国史と民俗学」『定本柳田国男集』第二四卷九一頁。
- (2) 「日本における内と外の観念」長浜功編『柳田国男文化論集』一九三頁。
- (3) 「魂の行くへ」『定本柳田国男集』第一五卷五六一頁。
- (4) 「山宮考」『定本柳田国男集』第一一卷三四一頁。
- (5) 「明治大正史世相篇」『定本柳田国男集』第二四卷四一三頁。

(受稿：2006年6月1日 受理：2006年6月12日)